

第3章

園での生活

1. 園生活の様子

1. 在園期間と園生活の様子 (図3-1)

子どもの在園期間では、3ヵ月以下の子どもが13.6%、4～6ヵ月が11.4%、7～11ヵ月が6.1%、1年～2年が28.3%、2年以上が40.6%であり、1年以上通園の子どもが、全体の68.9%を占めていた。

全体の保護者の72.6%は子どもが「とても慣れている」が、24.7%の子どもは「少し慣れている」であり、「あまり慣れていない」は2.4%であった。

園に慣れるためにはどの程度の在園期間が必要かを探った。図のように在園期間が3ヵ月以下でも約半数の子どもが「とても慣れている」と答えている反面、在園期間が7～11ヵ月の子どもでも「とても慣れている」のが58.8%に留まっており、慣れるにはかなりの期間が必要とされることが示されている。

2. 子どもの年齢と園生活の様子 (図3-2)

子どもの年齢との関係で見た場合、年齢の

大きい子どもほど慣れている結果が得られた。0歳児では「とても慣れている」は44.0%に留まっていた。

今回の調査では、年齢の大きい子どもほど在園期間も長いことから、子どもが園に慣れることには、年齢と在園期間がともに影響していると思われる。

3. 子どもの日本語能力と園生活の様子 (図3-3)

言葉の発せられる2歳以上の子どもの日本語能力と園への慣れの関係調べた。「日本語がよくできる」子どもは「とても慣れている」が85.8%を占めている。一方、「少し」、あるいは「あまり出来ない」子どもでも50%以上の子どもが「とても慣れている」と答えていた。一方「ぜんぜんできない」子どもの62.5%が「少し慣れている」で、「あまり慣れていない」は37.5%で、「ぜんぜん慣れていない」はいなかった。

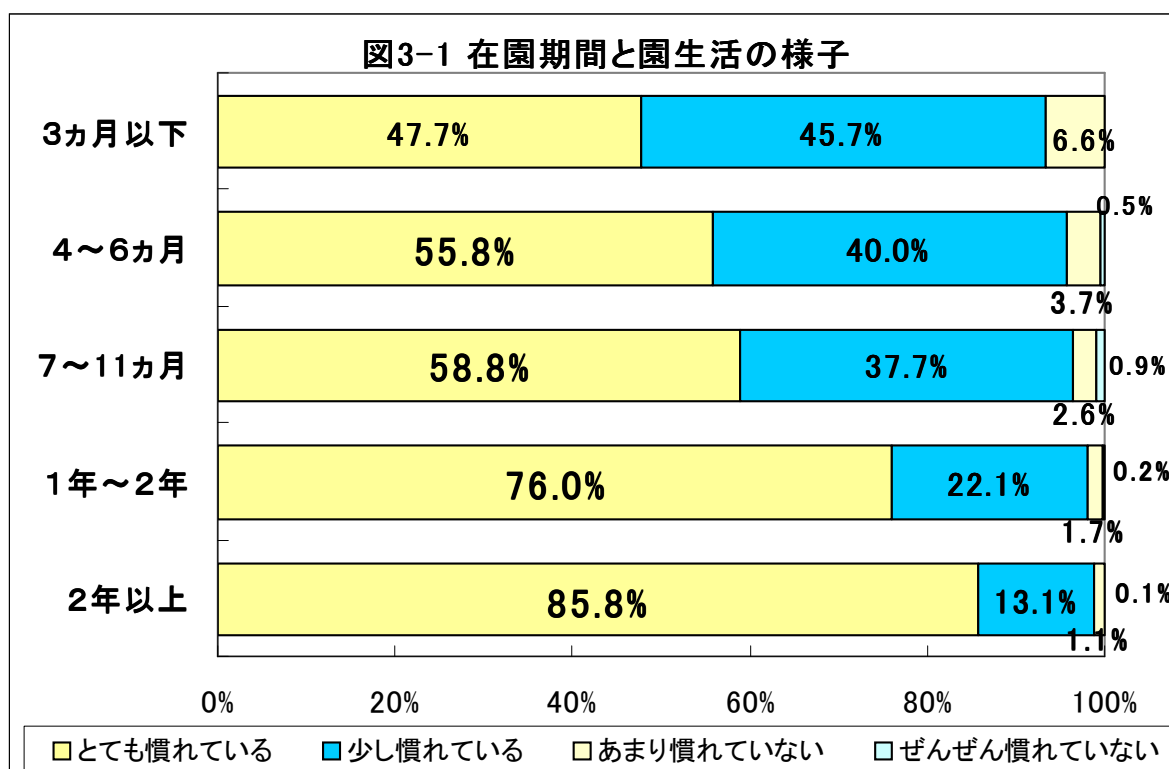
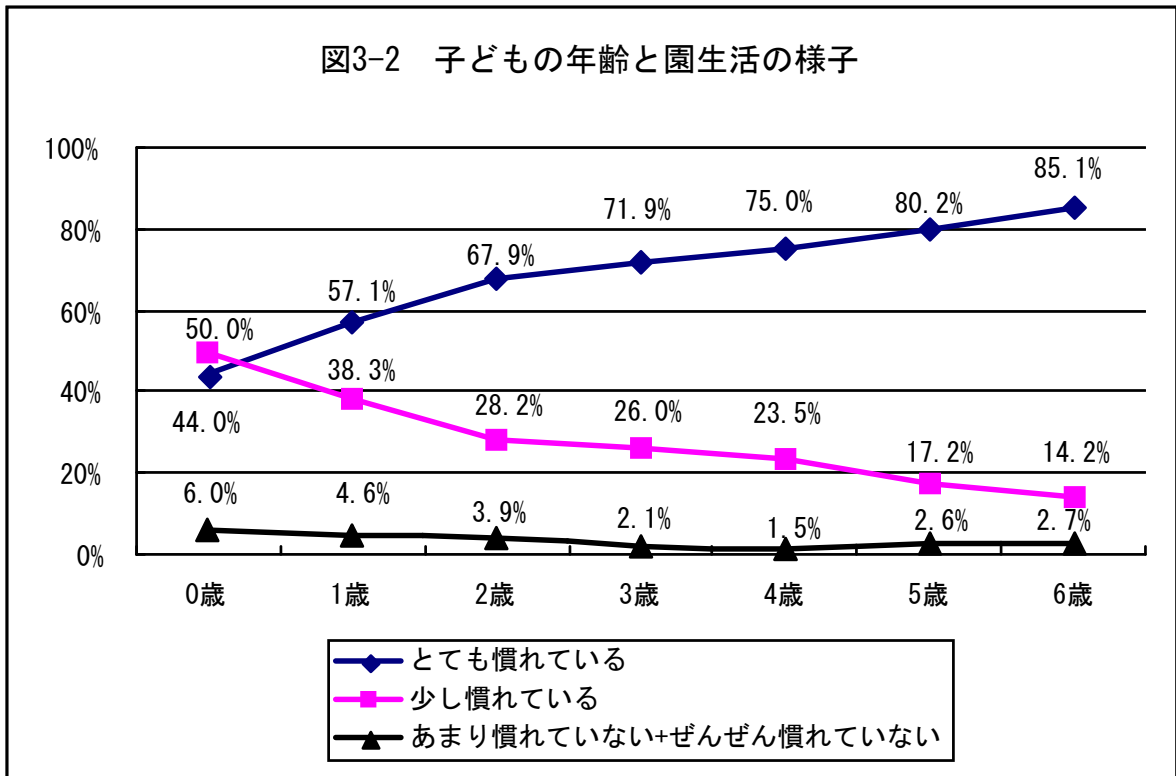
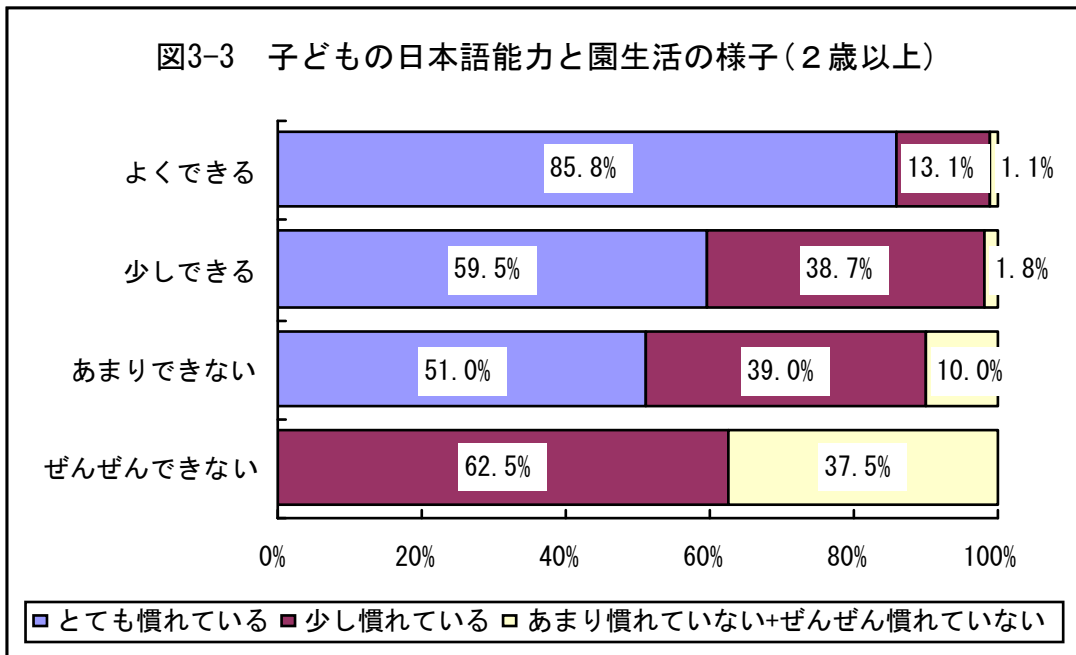


図3-2 子どもの年齢と園生活の様子



N=1907

図3-3 子どもの日本語能力と園生活の様子(2歳以上)



N=1592

2. 園に慣れるために役立ったこと

1. 園に慣れるために役立ったこと

(図3-4)

保護者は子どもが一日も早く園に慣れ親しみ、他の子どもと仲良く遊べるようになることを願っている。そのために園および周囲の人々はどのように接し、子どもの慣れを促したらよいのだろうか。保護者が子どもが園に慣れるために役立ったことについての調査結果を示した。多くの保護者は「子ども自身の適応力の早さ」あげる。「子どもが慣れるように保護者自身が努力」する一方で、「先生が子どもに特に配慮してくれた」41.5%や「先生が親に親密に連絡を取ってくれた」32.1%などのように、園の子どもおよび保護者への心遣いが子どもが慣れるために大切なことと考えている。また「日本人の周りの保護者や園児たちが話しかけてくれた」も子どもにとっては、園に慣れるための重要な要素となっているようである。「先生が特に配慮」は、子どもの年齢は関係がなく、全ての年齢の子どもを持つ保護者が同じように答えていたことから、園の心遣いが保護者に伝わり、それが子どもの園への慣れを促したことを示したものと考えられる。また、「先生が母語を学ぶ努力をしてくれた」5.2%と「母語で子どもに語りかけてくれた」6.3%と答えた保護者が合わせて10%を越えていたこと、また「先生が母文化紹介の機会を作る」5.1%、あるいは「先生が国・文化を紹介」3.5%など、園の「母文化への理解」をあげた保護者もいた。これは、子どもに母文化への誇りを持たせるという意味でも大切なことであるが、もう一方で、保護者の園への信頼感を高めることにつながっている結果を示している。

2. 滞在年数と園に慣れるために役立ったこと (表3-1)

園に慣れるために役立ったことを滞在年数別で探った。

最も多くの保護者があげている「子どもの適応力」は全ての保護者で大きい値を示す。

一方「先生が特に配慮してくれた」では滞在期間が0～3年未満の保護者にとくに多く、滞在期間が短く、慣れない日本での子育ての中では、「子どもに対する先生の特別な配慮」に対しては保護者自身も大きな安心感を抱くのであろうが、60.7%の保護者が「役立った」と答えている。20年未満と20年以上の間にも大きな差異があり、子どもへの配慮が保護者の滞在年数が10年～20年経過していても子どもが慣れるためには必要だと感じていることがわかる。「先生が親密に連絡を取ってくれた」との答えは滞在年数にあまり関係なく、保護者との親密な連絡が子どもの園への慣れに必要とされることを示している。

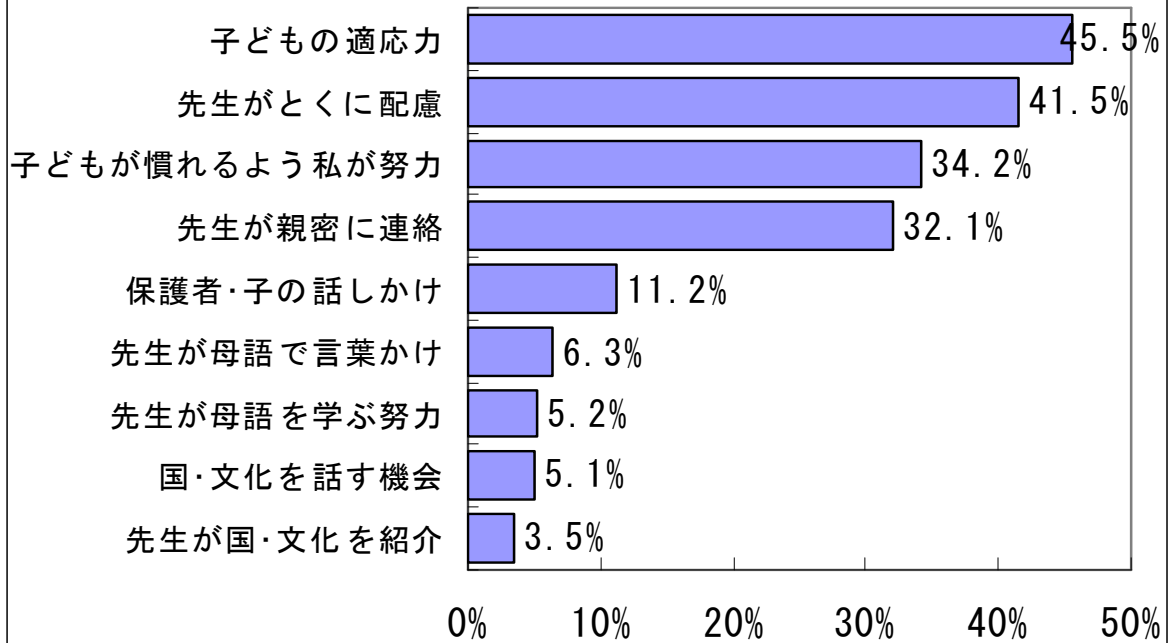
「子どもが慣れるように保護者が努力した」のは20年未満に多く、外国生活というある意味での緊張した生活の中で、努力をする保護者の様子がうかがわれる。「先生が保護者の母語を学ぶ努力をしてくれた」ことも滞在年数の短い保護者が多くあげていることである。日本語の比較的不得手な保護者との会話のために、園側が母語を学ばざるを得なかったということもあろうが、母国の文化を尊重する園の姿勢は、滞在年数の短い保護者に対しては、信頼感を与え園への帰属意識を増す結果となったと思われる。

3. 滞在期間 (0～10年) と園に慣れるために役立ったこと (図3-5)

滞在年数の短い保護者でとくに数値の高かった「先生がとくに配慮」と保護者と先生の間で直接関係する「先生の親密な連絡」について、滞在10年以内の保護者に関して、1年ごとに区切って調べてみた。「先生の親密な連絡」は数値的にはこの間とくに変わらなかったが、滞在年数による日本語能力のちがいなども関係するものと思われる(第3章-5 コミュニケーションの項を参照)。

一方「先生が特に配慮」は1年未満では56.4%、1年目では67.9%のように、1年目でとくに高い値を示したが、その後徐々に低下した。

図3-4 園に慣れるために役立ったこと



N=1956

表3-1 滞在年数と園に慣れるために役立ったこと

	0～3年未満	3～10年未満	10～20年未満	20年以上
先生が母語で言葉かけ	4.2%	8.1%	5.9%	5.1%
先生がとくに配慮	60.7%	44.3%	45.8%	26.4%
先生が親密に連絡	36.1%	36.7%	31.6%	29.8%
先生が国や文化を紹介	7.9%	2.6%	3.6%	6.2%
国や文化を話す機会づくり	5.8%	6.5%	5.2%	1.1%
保護者・子のお話かけ	13.6%	13.0%	11.7%	6.2%
先生が母語を学ぶ努力	12.6%	5.2%	3.2%	5.6%
子どもの適応力	50.8%	47.9%	47.4%	57.3%
子どもが慣れるよう努力	39.8%	41.2%	35.7%	14.6%

N=1842

3. 子どもの日本語能力と園に慣れるために役立ったこと(図3-6)

2歳以上の子どもの日本語能力との関係で見た場合、「先生が特に配慮」は「よくできる」子どもに比べて、不得手な子どもに、より必要である結果を得た。同様に「先生の親密な連絡」も「よくできる」子どもをもつ保護者に対してよりも、日本語が不得手な子どもをもつ保護者に対し、より「親密な連絡」が必要であると示す傾向が示された。その中で「ぜんぜんできない」子どもをもつ保護者の場合は数値が低くなっている。これは、「ぜんぜんできない」子どもをもつ保護者は、日本語が不得意な割合が有意に多いことから、「親密な連絡」がむずかしいことを示していると思われる。

4. 園に慣れるために役立ったことの「その他」の項に記載された内容

特に多く記載されていた事柄をあげる。

同国出身者の存在

慣れるのに都合が良かったこととしては、「同じ出身国からの子どもがいる」(保3女・母32歳・韓国・7年)こと、「兄弟姉妹が同じ園に通っていた」(保3男・母35歳・韓国・7年)こと、また「園が外国人の子どもの対応に慣れている」ことも大切な要因であろう。

慣れるまでの期間

「日本語がわからなくて、子どもが保育園に2週間までは行きたがらなかったもので、初めの時は保育園に行かせるのが大変だった」(保5女・父35歳・韓国・1年)と記している。「3,4ヶ月後次第に慣れてきました」という例や、また「子どもが孤立しないよう日本語を教えている」など保護者が努力をしている例もみられた。

保護者の同伴

さらに具体的には「子どもの園での生活の慣れるために一定期間はお母さんの同伴許可をしてくれた。幼稚園の行事にもお母さんの同伴を許可してくれたので、子どもはたやすく慣れるようになった」(年少男・母36歳・韓国・0年)など柔軟性のある園の対応が効果的に作用した例である。

保育者の配慮・資質

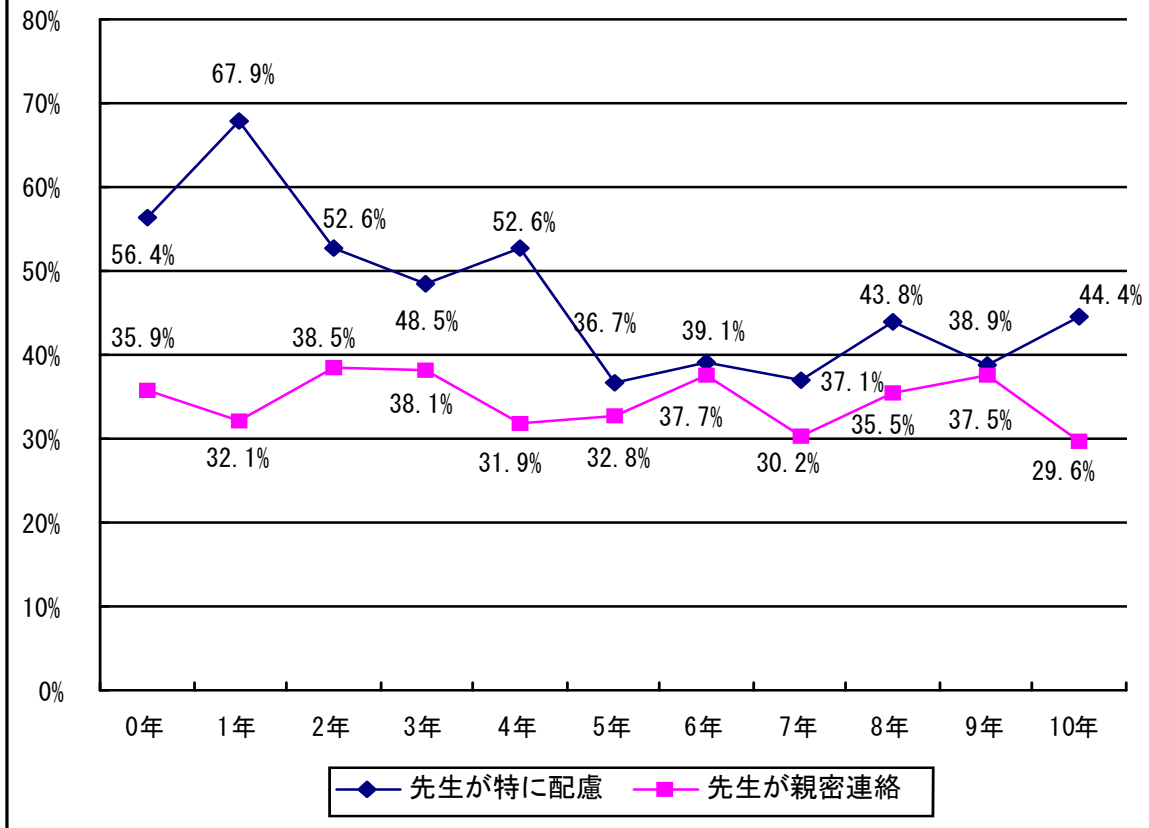
また最も多い記述は、「特別な配慮をしてくれる保育者がいたから園に慣れた」であるが、その中で、「先生たちがとてもよくしてくれるので何の心配もない。日本人の子どもたちと同じように接してくれる」(保5男・母38歳・ブラジル・8年)など、「特別な配慮」も必要だが、「保育園で特別に外国人ということで配慮してくれたことはない。かえって日本人の子と同じに扱ってくれたこと」(保1女・母33歳・韓国・8年)をあげる保護者もあった。そして何より「保育所の先生はみんなやさしく親切な人です」など保育者の基本的な人間性、子どもに愛情を持つ気質をあげている。それは、「先生の優しさ」や、「暖かさ」、「努力」、「思いやり」など、保護者の表現はいろいろ異なるが、それらが子どもの園への慣れを促すのだと多くの保護者はとらえている。

一方、配慮の必要な子どもには「日本語の不得手な子どもと親には、より深い思いやりと神経を使ってくれれば、と思う。一定期間、例えば1~3ヶ月位は、子どもがよく慣れるよう積極的に気を遣ってくれれば」(保3男・母32歳・0年)と願う親もいる。

国際性の欠如との批判も

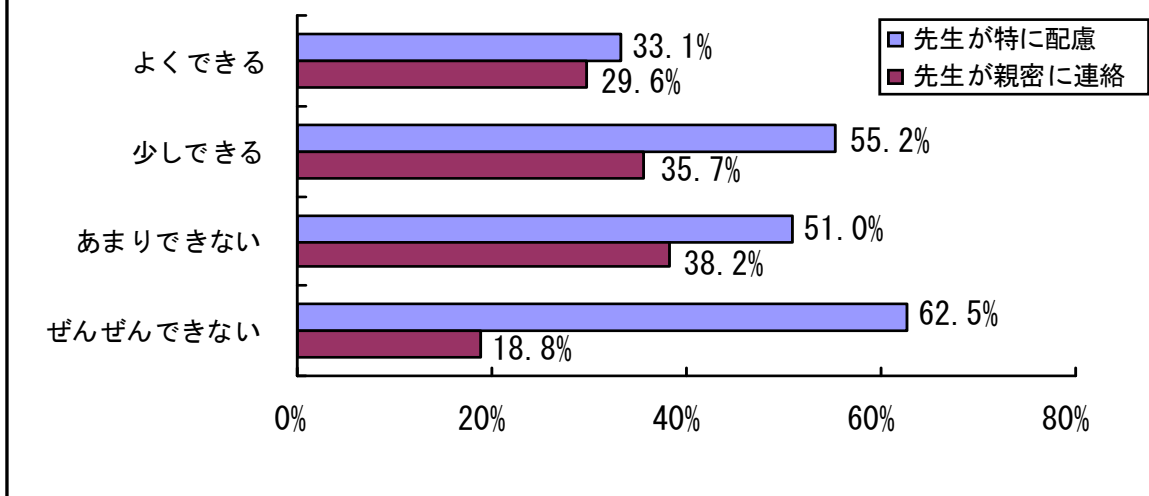
また、日本人全体に向けてではあるが、「外国人に対してあまりにも無関心である、もっと積極的に気を遣ってくれても」(保3男・母32歳・0年)との批判もある。また「園でスペイン語でコミュニケーションできる先生がいてくれたら」(保1男・母31歳・コロンビア・6年)、あるいは、「各保育園に1名くらい外国語のできる先生がいたらよいと思う、相談できるから」や「自分はブラジル人なのだからポルトガル語で話して下さい」(保5男・母29歳・ブラジル・4年)などを当然と考える保護者がいるという認識も持つておくべきであろう。

図3-5 滞在期間(0~10年)と園に慣れるために役立ったこと



N=1335

図3-6 子どもの日本語能力と園に慣れるために役立ったこと (2歳以上)



N=1621

3. 通園させて良かったこと

1. 通園させて良かったこと(図3-7)

最も多いのは「同年代の子どもと遊べる」86.4%ことであり、次いで「労働・勉強の時間が持てること」69.3%、「保育内容やイベント・プログラムなどを楽しんでいる」61.1%と続き、どの項目も高い値を示している。「子どもが日本語をおぼえる」、「日本の育児方法を知る」なども多いが、これらは保護者の滞在年数とも関係するであろう。

2. 滞在年数と通園させて良かったこと

(表3-2)

「同年代の子どもと遊べる」は滞在年数にあまり関係なく高い数値を示している。「労働・勉強の時間」や「保育内容・イベントを楽しむ」も同様の傾向を示す。

一方滞在年数が短い場合には「日本語を覚えること」が大きく、滞在年数が長くなるにつれ低下はしているが、滞在10～20年の保護者でも2人に1人あげている。さらに20年未満の保護者にとっては、「日本の育児内容を知る」良い機会になっている様子が見える。「園の先生が相談相手になっている」は滞在20年までは、滞在年数が増すにつれ高くなっている。園の先生が頼りにされている様子が見え、10年～20年の滞在では34.6%もの保護者が園の先生に相談している。「親同士知り合い」は滞在年数の経過とともに増している。

3. 在園期間と通園させて良かったこと

(表3-3)

在園期間との関係では「先生が相談相手」と「親同士知り合い」は在園期間が長いほど多い傾向を示した。「先生が相談相手」で1年～2年で低い値を示したのは、ある程度、子育てに慣れた結果であり、2年以上では新たに相談内容が増すものと思われる。その他の項目ではあまり大きい差異はなかった。

4. 日本語能力と通園させて良かったこと

(表3-4)

保護者の日本語能力との関係では「先生が相談相手」では「よくできる」ほど相談していた。「親同士知り合い」では「よくできる」親が高い値を示したが、「ぜんぜんできない」親でも25.7%が良かったことにあげている。顔見知りになることも大切なことであろう。

5. 「その他」に記載された内容

日本の文化を学んだり、社会性を身につける

「日本語の上達はもちろんではあるが、子どもが社会性を身につけることができる」(保1男・母27歳・ブラジル・5年)と記している。「子どもが先生から正しい日本の文化を習うことができた」(保3男・母35歳・タイ・8年)、また「子どもたちの将来のために日本語を勉強し、日本の文化・習慣を学ばせたい」(保0女・母・ラオス)などである。

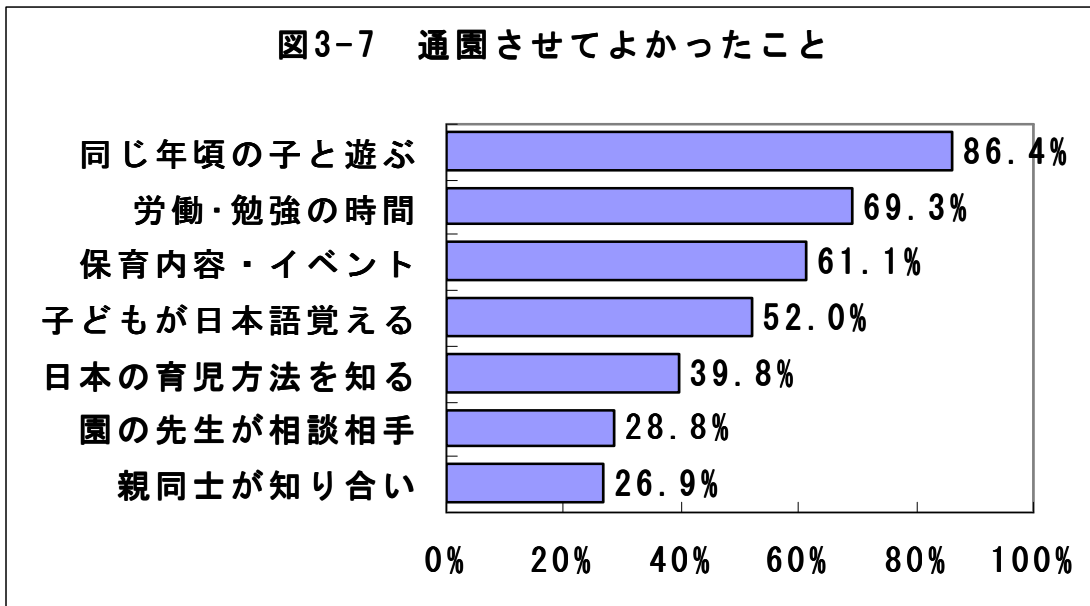
園の先生が相談相手に

「保育所に預かる目的は集団生活でよい習慣をつけるためです…中断…私は子育ての経験がないので困った時、保育所の先生に教えていただくことができるので助かります。次は子どもを保育所に預けると私は勉強と仕事もできるし、色々なことを体験して、経験をつんで、日本の社会に慣れることができます。それもこれからの子ども教育に役に立つと思います(保4女・母35歳・中国・5年)。

親のストレス解消にも

「1人で子育ては大変。知り合いもなく日本語ができないので、日本人とコミュニケーションがとれない。保育園は私にとって大切な場所。そのおかげで働けるし、ストレスもたまることもない。子どもにもやさしくなったような気がする」(保2女・母37歳・ブラジル・6年)。外国での子育てには、さまざまなストレスが伴うであろう。入園とストレス解消の関係を記述した母親が多かった。

図3-7 通園させてよかったこと



N=1956

表3-2 滞在年数と通園させて良かったこと

	0~3年未満	3~10年未満	10~20年未満	20年以上
子どもが日本語を覚える	71.3%	59.9%	47.3%	8.9%
同じ年頃の子とも達と遊べる	87.7%	83.8%	84.6%	90.2%
保育内容やイベント・プログラム	64.1%	61.0%	61.8%	50.9%
労働・勉強の時間をもてる	74.9%	68.9%	64.7%	67.3%
日本の育児方法・生活習慣を知る	44.6%	45.8%	39.6%	6.5%
親同士が知り合いになる	21.0%	25.0%	28.2%	34.1%
園の先生が相談相手	22.1%	27.4%	34.6%	25.7%

N=1842

表3-3 子どもの在園期間と通園させて良かったこと

	(%)				
	3ヶ月以下	4~6ヶ月	7~11ヶ月	1~2年	2年以上
先生が相談相手	24.7	25.0	31.0	24.7	33.0
親同士が知りあい	15.8	21.3	25.9	24.1	32.8

N=1902

表3-4 日本語能力と通園させて良かったこと

	(%)			
	よくできる	すこしできる	あまりできない	ぜんぜんできない
先生が相談相手	30.5	27.5	25.9	17.1
親同士が知りあい	30.7	24.6	21.9	25.7

N=1873

4. 園生活での気がかり

1. 園生活での気がかり (図3-8)

園生活での最も大きな気がかりは、「いじめ」32.0%と「裸足保育・薄着」27.5%である。次いで「日本の言葉・食物に慣れ過ぎ」17.5%、「参加行事が多い」17.4%、「準備するものが多い」17.0%、「日本人保護者との付き合い」14.9%と続く。「準備」や「参加行事」は日本の保護者も同様に困難事項としていることではあるが、やはり日本の言葉・文化に慣れない保護者にとってはより大きい、また別の意味をもった困難事項として受け止めているようである。(「その他」に書かれた内容の項参照)

2. 滞在年数と園での気がかり (表3-5)

滞在年数との関係では、「いじめ」の心配は10年未満に特に多く、滞在が10年～20年の保護者でも28.6%が心配事としてあげている。20年以上では少ない。「裸足保育・薄着」でも20年未満で多く、滞在直後から20年近くを経過しても、「裸足保育・薄着」には慣れにくいという結果を示した。「参加行事」や「日本人保護者との付き合い」は3年～10年の滞在の保護者にやや多いが全体として20年未満の滞在者に多い。「準備するものの多さ」は滞在年数とあまり関係なく、煩わしいことと感ずるようである。「日本の言葉や食物に慣れすぎ」や「食事の材料や味が違う」は滞在年数の経過とともに低下する。

3. 出生順位・子どもの性別と園での気がかり

出生順位との関係では、「いじめ」の心配は第1子が多く(35.7%)、第2子以降は有意に少ない(26.0%)。「裸足保育・薄着」は第1子が30.2%、第2子が23.1%など、「準備するものが多い」以外はすべて第1子が第2子より大きい値を示す。子どもの性別では「裸足保育・薄着」では、わずかに女兒に対してより心配する傾向を示すが、他の項目では、男女児への心配に差異はない。

4. 子どもの滞在年数と園での気がかり

図表には示していないが、「いじめ」と「裸足保育・薄着」について、子どもの滞在年数との関係で探った結果、「いじめ」は滞在6年時でとくに高い値(44.0%)を示す以外は0年から5年までそれほどの差異はなかった。一方、「裸足保育・薄着」は滞在年数につれてわずかではあるが低下傾向を示したが、どの滞在年数においても保護者の大きな気がかりとなっていた。

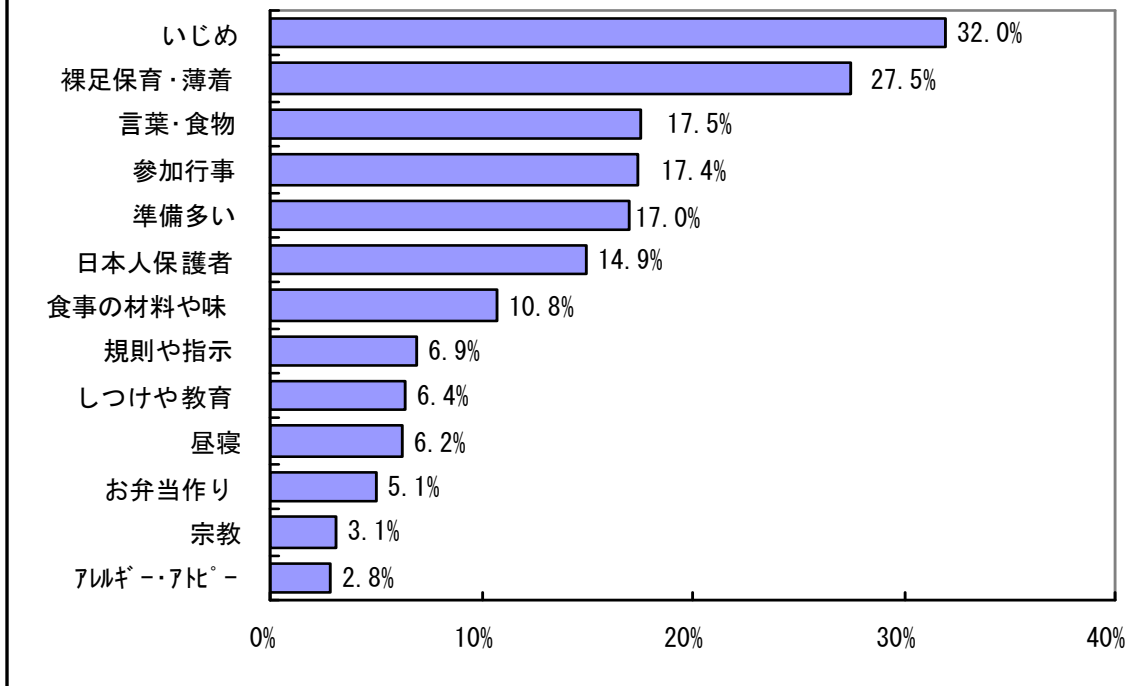
5. 親子の日本語能力と園での気がかり

(表3-6)

保護者の日本語能力の違いによって、「いじめ」と「日本人保護者とのつきあい」についての気がかりに差異があるかどうかを調べた。「いじめ」は「あまりできない」保護者が最も心配しており、「ぜんぜんできない」保護者には他に多くの気がかりがあるためか数値的には大きくはなかった。一方「日本人保護者とのつきあい」は日本語が得意でない保護者ほど気がかりと感じているようである。

一方、2歳以上の子どもについて、子どもの日本語能力と親の「いじめ」の心配の関係を見た結果、日本語の不得手な子どもの親がとくに気がかりと感じていることが示された。「あまりできない」子の親は52.0%が、また「ぜんぜんできない」子の親は68.8%が心配している。日本語が不得手なために遊びにいらしてもらえない、仲間はずれにされるなどの心配があるのであろう。

図3-8 園での気がかり



N=1956

表3-5 滞在年数と園での気がかり

	0～3年未満	3～10年未満	10～20年未満	20年以上
食事の材料や味が違う	16.4%	13.1%	8.9%	2.8%
宗教の関係で食べれない食材	6.7%	2.1%	3.3%	3.3%
アレルギー・アトピーで食べれないもの	2.1%	2.8%	3.9%	1.4%
お弁当作り	6.2%	5.8%	6.0%	0.5%
昼寝	5.6%	6.8%	5.6%	4.2%
裸足保育・薄着	33.3%	30.7%	31.5%	6.1%
準備するものが多い	17.9%	16.6%	20.1%	15.0%
参加行事が多い	15.9%	20.1%	18.7%	6.5%
規則や指示が多い	7.7%	7.3%	7.3%	5.1%
日本の言葉・食物に慣れすぎる	22.1%	21.6%	14.3%	6.5%
しつけや教育の違い	5.6%	7.8%	6.2%	2.3%
いじめ	37.9%	39.1%	28.6%	7.0%
日本人保護者とのつきあい	15.4%	18.5%	13.9%	5.1%

N=1842

表3-6 親子の日本語能力と園での気がかり (子は2歳以上) (%)

		よくできる	少しできる	あまりできない	ぜんぜんできない
親	いじめ	22.8	35.1	48.1	31.4
	日本人保護者とのつきあい	11.4	17.2	17.8	22.9
子	いじめ	27.9	41.7	52.0	68.8

親 N=1873, 子 N=1621

順位	日本	中国	台湾	韓国	朝鮮	タイ
①	いじめ	裸足保育・薄着	いじめ	いじめ	準備するもの多い	保護者つきあい
	28.8	42.8	29.0	24.3	17.5	34.0
②	裸足保育・薄着	いじめ	裸足保育・薄着	裸足保育・薄着	参加行事が多い	いじめ
	23.7	42.0	21.0	20.5	12.5	28.0
③	準備するもの多い	日本語食物慣れ	保護者つきあい	日本語食物慣れ	規則や指示が多い	裸足保育・薄着
	17.9	22.7	21.0	18.2	5.0	24.0
④	日本語食物慣れ	参加行事多い	参加行事が多い	準備するもの多い	日本語食物慣れ	日本語・食物慣れ
	16.8	22.7	17.7	15.8	5.0	20.0
⑤	参加行事多い	準備するもの多い	準備するもの多い	保護者つきあい	昼寝	参加行事が多い
	14.6	21.5	14.5	14.9	2.5	16.0
⑥	保護者つきあい	食事材料・味違う	日本語食物慣れ	参加行事多い	お弁当作り	準備するもの多い
	8.8	17.5	14.5	14.2	2.5	14.0
⑦	食事味違う	保護者つきあい	食事材料・味違う	昼寝	しつけ・教育が違う	食事材料・味違う
	8.0	13.8	8.1	8.9	2.5	12.0
⑧	しつけ・教育が違う	お弁当作り	規則や指示が多い	規則や指示が多い	アレルギー	しつけ・教育が違う
	6.2	9.7	4.8	8.3	2.5	8.0
⑨	昼寝	昼寝	しつけ・教育が違う	しつけ・教育が違う		アレルギー
	5.5	5.4	4.8	5.9		8.0
⑩	お弁当作り	しつけ・教育が違う	昼寝	お弁当作り		昼寝
	5.1	5.0	3.2	3.6		6.0

順位	フィリピン	ベトナム	ブラジル	ペルー	アメリカ	その他
①	いじめ	いじめ	いじめ	いじめ	準備するもの多い	裸足保育・薄着
	34.7	52.8	53.3	51.4	33.3	27.1
②	保護者つきあい	日本語・食事慣れ	裸足保育・薄着	裸足保育・薄着	いじめ	いじめ
	29.6	36.1	43.3	43.3	22.1	25.4
③	参加行事が多い	裸足保育・薄着	日本語食物慣れ	日本語食物慣れ	裸足保育・薄着	日本語食物慣れ
	23.0	25.0	20.0	27.0	14.8	23.7
④	裸足保育・薄着	参加行事多い	参加行事が多い	食事材料・味が違う	参加行事が多い	準備するもの多い
	17.3	19.4	18.3	18.9	14.8	20.3
⑤	準備するもの多い	準備するもの多い	保護者付き合い	参加行事が多い	しつけ・教育が違う	宗教で食べれない
	11.2	8.3	16.7	10.8	14.8	19.8
⑥	昼寝	規則や指示が多い	規則や指示が多い	しつけ・教育が違う	日本語食物慣れ	保護者つきあい
	9.2	8.3	13.3	10.8	14.8	15.3
⑦	しつけ・教育が違う	保護者つきあい	しつけ・教育が違う	保護者つきあい	保護者つきあい	参加行事が多い
	7.1	8.3	13.3	10.8	14.8	15.3
⑧	食事材料・味が違う	アレルギー	食事材料・味違う	準備するもの多い	アレルギー	食事材料・味違う
	7.1	2.8	11.8	8.1	7.4	14.7
⑨	アレルギー	食事材料・味が違う	準備するもの多い	規則や指示が多い	規則や指示が多い	しつけ・教育が違う
	5.1	2.8	10.0	5.4	7.4	10.7
⑩	お弁当作り	昼寝	アレルギー	アレルギー	昼寝	昼寝
	4.6	2.8	3.3	2.7	3.7	9.6
⑩						規則や指示が多い
						9.6

（注）国籍・地域の詳細についてはp2を参照

N=1868

6. 国別心配項目 (表 3-7, 3-8)

園生活での気がかりを国・地域別に1位~10位までを列挙した。「いじめ」を1位、2位にあげている国・地域は、朝鮮以外全てであった。ブラジル、ベトナム、ペルーでは半数以上があげており、次いで中国、フィリピンと続き、これらの国ではいずれも30%を越えている。「裸足保育・薄着」では、3位までにあげていない国は朝鮮とフィリピンのみであり、保護者のあげている割合の高い順に、ブラジル、ペルー、中国、次いでベトナム、タイ、日本と続く。自由記述の中でも、厚着、薄着の習慣や冬の寒さ、過ごし方の違いが指摘されている。「準備するものが多い」はアメリカが最も多く、中国、日本、韓国と続く。出身国・地域の保育所・幼稚園のシステムとの違いと考えられる。「日本人保護者とのつきあいの煩わしさ」はタイ、フィリピンで30%前後の保護者が感じている。「参加行事が多い」を心配事としてあげているのはフィリピン、中国、ベトナム、ブラジル、台湾などであり、自由記述のなかでも「仕事は休みにくいけれども、子どものためには参加したい」と述べている。「宗教の関係で食べられないものがある」は「その他の国」に多く、国籍は日本、パキスタン、エジプト、バングラデシュ、インドネシアなどであった。

7. 園での気がかりに関する自由記述内容

裸足保育・薄着

ここでも多いのが「裸足保育・薄着」である。「風邪をひかない環境をつかって欲しい(体質を鍛えることもよいことだが)。冬は少し厚めの服を着せて…、度々風邪をひいてしまって、仕事を休めないことを忘れないで下さい」(保4男・母33歳・8年)。薄着や裸足の習慣のない地方や暖かい国出身の保護者からが多い。「風邪を悪化させるのではないか」、「治りにくくするのではないか」などの意見は多く寄せられる。子どもの苦痛の他に「保護者の勤めを休む」ことにつながると感じている。従来体を鍛えるための「裸足保育・薄着」ではあるが、保護者の要望にも配慮が必要であろう。

保育園でも勉強を

「日本の子どもの教育は子どもの生活の独立性

や創造性を学ぶことを中心としていて、教育を重視していません」(年長女・母30歳・中国・9年)のように、基礎知識の習得にも力を入れて欲しいと望む保護者は非常に多い。とくに中国の保護者から多く寄せられている。典型的な例をつぎにあげる。「日本の保育園は幼稚園とは大きな違いがあります。同じ年齢の子どもに対して、幼稚園では国語や算数を教えていますが、保育園では何もぜんぜん教えてくれません。中国の保育園のように、子どもにいろいろなことを教えるのは子どもの負担になりますが、日本の保育園のように、何も教えなく、子どもの今後の勉強能力に影響があるのではないかと心配です。小学校に入ると幼稚園から来ている子どもと同じレベルで進めるのができないかもしれません。日本も就学前教育を重視していますが、何故、保育所は違うのでしょうか」(保4男・母40歳・中国・9年)。保育所は保護者に対し、自信をもって納得のいく説明をする必要があるように思われる。

宗教や文化の違い

「キリスト教の外国人にとっては日本の園はとてもやりにくい。というのは異教の祭りに強制的に参加させられるから。例えば、七夕であるとか、豆まきなど」は園の説明が不足であったかもしれない。ただそのように考える保護者が多いとの認識は持っておいたほうがよいと思われる。また園の行事には日本の古くからの言い伝えや伝説、また余り意識はしないが宗教に根ざしたものも含まれる。「日本古来の文化を映し出すものとしてむしろ奨励されるべきもの」ととらえる保護者がいる一方、「私と違う宗教行事に参加させられること」(保1男・母27歳・ブラジル5年)を気がかりとしてあげている保護者も多い。はっきりとした宗教観をもつ保護者には説明が必要であろう。また、同じ保護者は「文化の違いで奇異に感じる」と述べ、例えば、「頭をたたくこと、息子が真似をして困る」などをあげている。

先生の優しい気配りを

「有能で信頼できる先生がいるので、私は心配がありません」(保4女・父45歳・カンボジア・10年)のように、慣れるために役立った「先生

方の配慮の深さ、やさしさ」は、欠如した場合は大きな「気がかり」としてあげられる。「意思疎通が出来ず、子どもが願っていることを先生や友達が無関心のまま放置する、一人ぼっちにされる」(保3男・母34歳・2年)と感じている。「用意するものは難しくはないが、一回ずつ確認できない場合もある。もうちょっと優しく気を配って欲しい、先生はやはり、疲れているけど、一番大事な役割をする」(保6男・母34歳・0年)のように、優しくしてくれない先生に対する不満もある。「先生は忙しすぎ」、あるいは「疲れすぎ」とは承知していながらもやさしい配慮を願う親が多くいる。

いじめ

いじめはどの保護者の意識の中にも深く潜在している。「日本の母親や子ども達は外国人と見たらまずおかしく見る」(保5男・母33歳・5年)と感じる(コラム参照)。

参加行事と就業の問題—行事は土日に

「保育所の行事はいつも月～金の間に行い、私は仕事のため参加できません。なぜ土曜日に行わないのでしょうか」と多くの保護者が訴えている。「夜遅くか、土日に。そうでなければ、半日仕事ができるように早朝か、午後遅い時間に。お昼寝の時間にする意味はわかっていますけど」(保1女・母35歳・フランス・3年)。「園の行事は両親が参加しなければならないのですが、それも困っています。もし行かなければ、先生と子どもにおこられる。もし仕事を休んで行ったら、クビになってしまう…」(保5女・母28歳・3年)。子どものために保護者が仕事を休むことのむずかしい、余裕のない日本社会を映し出している。

延長保育を

「保育時間が厳しいです。仕事が忙しいとき、残業があっても子どもを預ける時間延長ができません」(保2女・母36歳・日本・9年)、また「幼稚園での保育時間がもう少し長ければ、幼稚園バスがあったら、幼稚園で昼ご飯を提供してくれたら、休み中にいろいろなプログラムをしてくれたら…」(年少男・母36歳・韓国・0年)などいろいろ希望がある。

施設・設備への心配

「地震の心配：地震が起きたとき子どもをどの

ように保護し、怪我人を助けるのが心配、保育所は耐震建築なのだろうか」(保3女・母33歳・カナダ・2年)、「他からの侵入者へのゲートの完備は？」(保1男・母27歳・日本・0年)の心配もある。

その他

多くの心配ごとの中から以下に列挙する。

男女の差；「日本人は男の子と女の子の取り扱いが違います。女の子はいつも脇におかれ、男の子が中心です」。

衛生面；「他の子どもや先生が病気をうつすかもしれないこと。オムツ交換の場所が、交換後消毒されていないこと。ビニールを引くとか、アルコールで簡単に消毒できる」

昼寝；「私の子どもはあまり昼寝をしないので、保育園で他の子どもの昼寝を妨害するとき先生に外に出されます。」昼寝のしない子どもには静かに本を読み聞かせるなどの配慮も必要かもしれない。

病児保育はどうなっている？；「風邪などで薬を飲んでいるとき保育園では薬を飲ませてくれないので、正しい時間帯に飲めないで、風邪が長引き、それに熱がでる場合が多い。子どもを預けることができない時一番困る。」

もっとシンプルに、ちょっと面倒？；「せっかく子どもを保育所にあずかってもらっているのに、もっとシンプルにして欲しい、例えば、紙オムツの選択、服の着替えも少なく、日本の保育所は準備させるものが多く、色々な要求も多いからちょっと面倒。」

夏の水不足の心配；「夏には子どもの飲料量が不足と心配です」も多い。

遊び道具など；「子どもの好きな泥んこあそびや古い道具を使った危険な遊び」など心配ごとは多岐に渡っている。

5. 園の先生とのコミュニケーション

1. 先生とのコミュニケーションの方法

(図 3-9, 3-10)

当初、母語を日本語としない保護者の子どもたちの入園数が増加し始めた時期には、園側と保護者の間に、言葉や文化の違いで意思疎通が図れず、双方に混乱が生じたという経緯がある。最近では、園側の努力や行政の支援などを得て、改善が認められるようになってきている。今回の調査では実際どの程度か意思疎通がはかられているのかを探った。

保護者全体での園の先生とのコミュニケーションでは「とてもよい」と感じている保護者は 28.0%、「ややよい」が 44.0%であり、7割以上の保護者が「よい方」と感じている結果となった。

園の先生とのコミュニケーションの手段について調べた結果、「良い方」では「先生から話しかけられる」66.2%、「自分から先生に話しかける」56.2%が多く、「連絡帳を通して書く」あるいは「積極的に行事に参加する」と続いている。「通訳をしてくれる人を探して話す」は 5.0%であった。

一方、コミュニケーションが「良くない方」と答えた保護者はその理由として、多くは日本語能力に係わることであるが、「保護者」や「先生」の多忙もあがっている。さらに「先生が自分に話すのを避けているようだ」との答えもあり、自由記述にも書かれていた。

2. 滞在年数と先生とのコミュニケーション

(表 3-9)

「良い方」と答えた保護者は先生とどのような手段でコミュニケーションをとっているのかを見た結果は、どの滞在年数の保護者も「先生からの話しかけ」が最も多く、滞在年数に伴い増加する。「先生に話しかける」は 10年～20年でもっとも高値を示した。「連絡帳」や「行事参加」は滞在年数であまり差異はない。「通訳」は 3年未満で「よい」と答えた保護者の 15.6%が利用している。

コミュニケーションが「良くない」と答えた保護者では、滞在年数が長くなるにつれ、「日本語で話しかけられない」や「連絡帳が読めない」の数値は減少するが、「連絡帳が読めない」は 10年～20年の滞在でも、43.5%の保護者があげている。「自分が忙しい」あるいは「先生が忙しそう」は滞在年数の長いほど多かった。

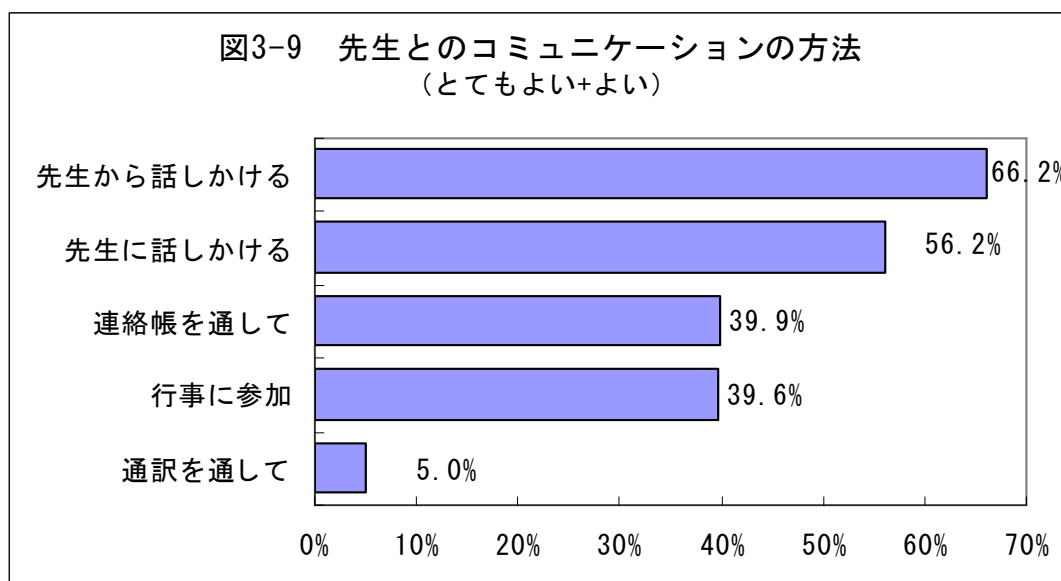
3. 日本語能力とコミュニケーションの方法

(表 3-10)

コミュニケーションが「良い方」では「先生から話しかける」は、日本語能力とは関係なく高い数値を示し、日本語の不得手な保護者でも、「先生から話しかけられる」ことによって、コミュニケーションが良いと感じていることがわかった。「先生に話しかける」「連絡帳を通して」「行事に参加」では日本語能力の高い保護者ほど高い数値を示したが、「あまりできない」や「ぜんぜんできない」保護者でも 30%前後の数値を示しており、保護者の努力がうかがえる。「コミュニケーションが良い」と答えた「ぜんぜんできない」保護者ではその 58.8%が「通訳を通して」であった。

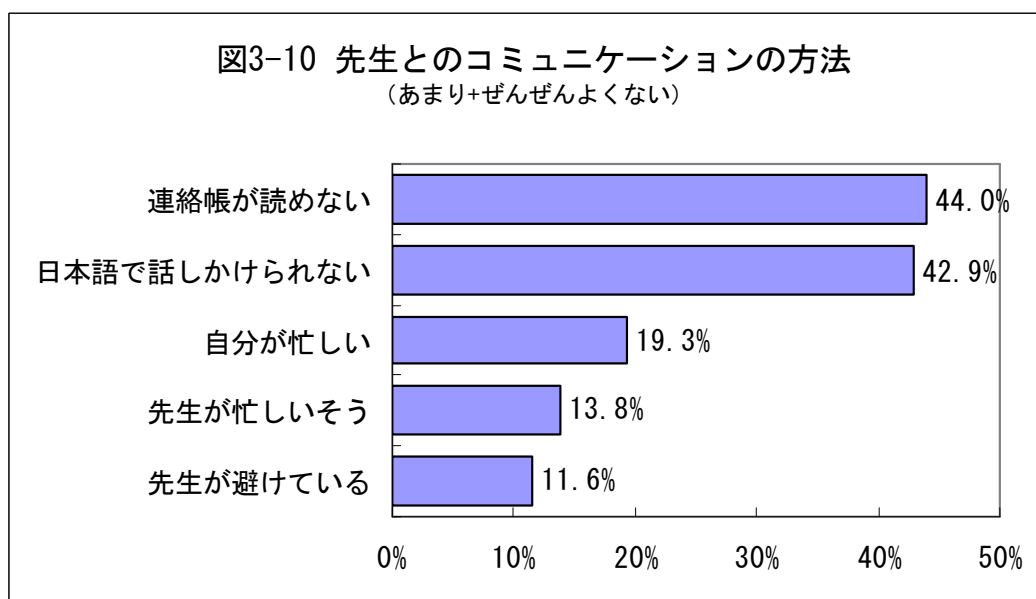
一方、「良くない方」では、「先生が忙しそう」「自分が忙しい」「先生が避けている」は日本語能力が高い保護者により多く見られた。「日本語で話しかけられない」は「少しできる」保護者でも 37.4%は「話しかけられない」と答えている。自分からの話しかけはなかなかむずかしいようである。「連絡帳が読めない」は「良くできる」保護者でも、コミュニケーションの良くない理由として、12.5%があげており、「すこしできる」41.1%、「あまりできない」57.6%、と数値はあがって、「ぜんぜんできない」場合は 80.8%の保護者がコミュニケーション不足の理由としてあげていた。連絡帳には何らかの配慮が必要であろう。

図3-9 先生とのコミュニケーションの方法
(とてもよい+よい)



N=1611

図3-10 先生とのコミュニケーションの方法
(あまり+ぜんぜんよくない)



N=275

表3-9 滞在年数と園の先生とのコミュニケーション

		0～3年未満	3～10年未満	10～20年未満	20年以上
良い方	先生に話しかける	40.7%	55.6%	62.5%	57.4%
	先生から話しかける	65.0%	64.5%	67.7%	73.6%
	行事等に参加	39.0%	40.0%	40.2%	42.1%
	通訳を通す	15.6%	6.1%	1.4%	0.0%
	連絡帳を通して	38.6%	39.7%	39.4%	45.7%
良くない方	日本語で話かけられない	67.3%	43.6%	23.9%	0.0%
	連絡帳等が読めない	64.0%	40.4%	43.5%	9.1%
	自分が忙しい	2.0%	16.7%	37.0%	45.5%
	先生が忙しそう	10.2%	14.7%	15.2%	18.2%
	先生が避けている	8.2%	10.3%	19.6%	9.1%

良い方 N=1535

良くない方 N=261

表3-10 親の日本語能力とコミュニケーションの方法

		よくできる	少しできる	あまりできない	ぜんぜんできない
良い方	先生から話しかける	69.0%	64.2%	66.0%	62.5%
	先生に話しかける	60.6%	56.1%	46.2%	37.5%
	連絡帳を通して	50.7%	33.0%	29.2%	31.3%
	行事に参加	43.8%	38.3%	32.5%	29.4%
	通訳を通して	0.7%	5.3%	15.1%	58.8%
良くない方	日本語で話しかけられない	0.0%	37.4%	62.6%	64.3%
	連絡帳が読めない	12.5%	41.1%	57.6%	80.8%
	忙しくて話ができない	40.0%	21.5%	12.1%	0.0%
	先生が忙しそう	25.0%	13.0%	13.1%	0.0%
	先生が避けている	22.5%	9.3%	7.1%	7.1%

良い方 N=1561

良くない方 N=259

6. 保護者たちの声：先生とのコミュニケーション

言葉・文化の異なる保護者とのコミュニケーションは園生活の中では、保育者・保護者双方にとって最も切実な問題である。以下保護者から寄せられたコミュニケーションに関するさまざまな意見を記述する。

言葉の壁

うまく話せない

「先生と子どもたちのことをもっと身近に話したいが、言葉の壁があるため話せなかったり、読めなかったりして、うまく表現できず、短い会話で終わってしまいます。自分たちの思っているようなコミュニケーションができません」

(保0男・父30歳・ボリビア・1年) が全ての日本語がまだ不得手な保護者の言葉を代表している。

「私は日本語を話す、読む、書くことができないので、保育園の先生とよくコミュニケーションをとることができません。…園から子どもを通してよく手紙がくるが、全部読めないし、理解することもできません、…子どもと園が問題にしていることについて心配しています。」

(保5男・母27歳・タイ・2年)。

また「連絡帳が読めない、読めませんと言うと代わりに読んでくれるが、意味がわかりません」など多くの保護者が述べている。

会話はできても手紙や連絡帳は読めない

また話すことはできても、読んだり書いたり不得意な保護者が多い。「ノートや手紙をあまり読めないのでは何かあっても、わからない。もし直接言ってくれたらわかります」など連絡帳への記載には注意が必要であろう。

ルビをふってくれたら

「漢字はよくわかりません」(保5女・母29歳・フィリピン・8年)「先生たちが言っていることはよく理解できます。だけど正直言って自分の気持ちを表現できないです。私は平仮名と片仮名の読みはできますので書いてあることは

ある程度はわかりますけど、漢字となるとさっぱりわからないので、困っています」(保5男・母31歳・ペルー・9年)。

また「連絡帳はほとんど読めます。先生の手書きの文字は判読がむずかしい。先生が新しい漢字にふり仮名をふってくれば助かります」(保3男・29歳・中国・8年)など、漢字はわかっても、手書きの漢字は読みにくい保護者も多いことがわかる。

今回の調査では連絡帳をとっても有用であるととらえている保護者が多い中、個々の保護者の置かれている状況に応じたきめ細やかな対応も必要とされることが示された。

言葉はわかっても…心の壁

「先生方と話したくない訳ではないのだけれど…、もし先生が積極的に聞いてくれる姿勢があると感じられたら、私は、先生方と話してみようと思います」(年中男・母30歳・8年)

「…ある先生は外国人の子どもには偏見がありますが、言葉の問題はその原因のひとつだと思います。その上、両国の文化や社会環境も違うし、互いには理解できないときもあります」や「文化の違いということで、こちらの要望を聞いてくれない、あいまいな返事しかない」(保3女・35歳・9年)との指摘もある。園側からは、保護者に対しては、歩み寄りの姿勢を示しながら、相互理解が進むような方策を探る必要もあると思われる。

「ある先生は(ひとりだけ)私のことを嫌いなのかも。とても冷たく感じる。」(保1男・母27歳・5年)や「先生は私が話しかけた時しか話してくれません。私に伝えられないことがあるのではないかと心配です。連絡帳には書くようにしてくれています」(保3女・母33歳・2年)のように先生からの積極的なコミュニケーションを望んでいる保護者もいる。

時間の制約

「話したいことはたくさんあるのですが、言葉の壁と時間の制約がコミュニケーションを妨げています。先生は英語を話そうとしてくれてはいますが」（保4女・父40歳・7州カ・0年）や「先生たちの仕事はきつい、私は先生たちを煩わせたくない」（保5男・母41歳・11年）と記した保護者もいる。

文化の違い

「先生に子どものことを聞いたら、『よく慣れている、よくできる』と言っている。しかし、子どもの話しや行動を見たらそうでないようで、「日本語のニュアンス」をよく理解できない」（保3男・母37歳・2年）などなかなか意思の疎通はむずかしい。

根気よく、気長に、コミュニケーションを

つぎに、「自分はこの道のプロフェッショナルである」と前置きして記述してくれた、「コミュニケーションのための良い方策」をあげる。これは子どもが園に慣れるために必要とされることにも関連して述べられている。

「子どもの教育をするには、保護者と先生が協力することが重要で、基本的なことであり、…中断…私たちが子どもたちに関して知っておかなければならないことは、多くの子どもたちは日本で生まれ育ち、外国の文化を受け入れたことがないので、外国人の両親をもつという感覚がなく、そのことについて、日本の子どもたちが慣れていないことである。それは習慣や文化の違いではなく、よいコミュニケーションを（できれば毎日）保護者と先生が保つことである。コミュニケーション（会話）をとるとき、言葉の問題（読み書き）はあまり重要なことではない。また先生が子どもたちと会話をもちたい時は、根気よく、気長に、なおかつ教育的に対応してもらいたい。私は子どもたちと先生のコミュニケーションをとる為のお手伝いを喜んでします… つぎのことをお勧めしたい。

- 1、わかりやすい情報、
 - 2、コミュニケーションを心がける
- （保4男・父43歳 ・ラテンアメリカ・

10年）

先生とのコミュニケーションのまとめ

- のんびり構える心の余裕

多くの保護者は「私は日本語が話せませんが、先生たちはとても親切にいろいろ教えてくれるので助かっている」など、親切に接してくれていれば、言葉が不自由でも「コミュニケーションがよい」と感じている。言葉の不得手な保護者であっても、コミュニケーションがよいと答えた保護者の数値の多さからもうかがえることである。

もちろん各言語で書かれた対話表の作成、通訳派遣などの種々の方策は必要ではあるが、一方で暖かい心が通じ合うという大切なことを保護者は示している。

以上述べたように、言葉や文化の異なる保護者に対応するための保育者に求められる資質としては「心の優しさ」や「いろいろ違って当然と考える国際性」はもちろんであるが、それと同時に「のんびり構える心の余裕」も大切であろう。望ましいコミュニケーションはそのような中から生まれるのではないだろうか。

文化・言葉の違いという大きな壁を前に、意思の疎通が困難な場合でも、あせらず、ゆったりとした対応が相手の心を和らげ、それがコミュニケーションにつながることを保護者たちの自由記述から読み取ることができる。

多忙な毎日の保育・教育のなかではなかなかむずかしいことではあるが、保育の現場にあっても、心の余裕はもっとも大切なことのひとつといえよう。

（ ）は保育園・幼稚園の別、学年、性・回答者の続柄、年齢・国籍・滞在年数を示す。

Column : 園でのいじめと多文化理解教育

外国籍あるいは背景に異なる文化をもつ子どもたちをとりまく保育・教育現場での諸問題は、保育者たちの熱心な取り組みによって、表面的には比較的短期間のうちに大半は解決するように見える。保育者も保護者とのコミュニケーションにおいて、お互いの文化を理解し尊重しなければ保護者とのトラブル（意思疎通の欠如）は永遠に続くことを実践を通して学んでいる。しかし意識しないにもかかわらず日本人のもつ異質な者を排除しようとする気質は、子どもの世界にも色濃く影響を与えている。今回のアンケート調査の自由記述の中で多くの保護者は、保育者や日本の子ども、そして日本人保護者の彼らへの日常におけるかかわりあいの中から、日本人のもつ外国人に対する偏見や差別意識を敏感に感じ取り、わが子へのいじめを心配し、日本での多文化理解教育の必要性を訴えている。多文化理解教育とはお互いの言語・文化の違いを乗り越えて望ましい共生社会を作るための方策を探り学ぶことである。保護者の自由記述をまじえて多文化理解教育の根幹にかかわる問題点をあげてみた。

“あの子外国人だから一緒に遊ばないで” おとなの言動をしっかりと受けとめる子どもの心、差別をする子・される子、双方に心の傷

『あの子外国人だからいっしょに遊ばないで』と言われた。このようなことを言われた人は私だけではないと思う。外国人を差別することは子どもの成長に悪い影響を与えるが、一番心配するのは自分の子どもがこのような傷を与えられたことだ、「外国人の子どもはいじめられて当然と考えられているのでは」など。どの国の保護者からも同様な訴えがなされた。指摘のように、「いじめ・差別」は日本人の親から子へ伝わり、また「いじめ・差別」された子どもは傷つき、保護者や保育者の適切な対応のない場合、子どもの全人格的な発達が阻害される。その一方いじめる側の子どもは「いじめ・差別」をしても許される社会があると知って、そのように行動することにより成長段階において人間性の欠如した思いやりのない人間になる可能性を孕んでいる。

いじめには毅然とした態度で —— 園での多文化理解教育を

「先生は意地悪な子や他の子をいじめることを許してはいけません。それはまた、他の子どもの正常な成長にも大切だと思う」・「自分の息子はいじめられ、けんかになることも多い。このようなことは私の国ではきちんとしつける」。保育者には、それが文化・言語の違いに起因するとは見えにくい場合でも、いじめに対しては決して許さないという態度を貫いて欲しい。「もし園に外国人の子どもがいれば、園のほうから子どもたちにその国の文化などを紹介したほうが良いと思う。子どもにもっと外国のことを認識させたら、その差別感が減るでしょう。」などは大切な多文化理解への提言である。

保育者・保護者への多文化理解教育を

「お願いすることは、もっと皆さんが外国人に対して、親切に、尊敬の気持ちを持って欲しいということです。理由は誰でも人間として生活する権利があるからです。皮膚の色、国や言葉の違いで差別しないで下さい」と、多文化理解の本質を突く。そして結局は「市町村、学校単位での人種差別に対する教育を強く望む」、つまり多文化理解教育は、日本に住む全ての人々の必修科目であると訴えるのである。